

バリアフリー支援室を利用する学生への アンケート調査報告

塩入 美希 (学生支援センター特命助教)
大沼 泰枝 (学生支援センター講師)
日高 幸亮 (学生支援センター非常勤相談員)
坂井 聡 (教育学部教授)

1. 問題と目的

2016年4月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（以下、障害者差別解消法）」が施行された。それに伴い障害を理由とした差別が禁止され、国立大学においては障害のある学生から配慮を希望する旨の意思表示がなされた場合、合理的配慮を提供することは法的義務となった。このことから、全国の高等教育機関では障害のある学生を支援する体制整備が急速に進められている。

本学では、障害者差別解消法の施行に先立ち2015年5月に障害のある学生の支援窓口としてバリアフリー支援室を設置した。翌年には専任教員を配置し専用室を設け、支援内容の柱を「修学支援」、「個別支援」、「居場所支援」、「学内の体制整備」、「啓発活動」、「関係機関との連携」とし、本格的に業務を開始した。これまで、バリアフリー支援室の活動（大沼ら、2017；大沼ら、2018）やピア・サポート体制（塩入ら、2019）について報告してきたが、バリアフリー支援室を利用する学生が支援室の取り組みをどのように評価しているのかについて調査したことはなかった。支援室が本格的に業務を開始して4年が経過した現在、バリアフリー支援室を利用する学生は年々増加し、学生のニーズも多様化している。併せて、合理的配慮を申請する学生も増加している。合理的配慮の申請をし、バリアフリー支援室で定期的に面談を行っている学生に対しては、実際の授業で受けている配慮や配慮を受けたことによる修学上の効果等について個別に聞き取りを行ってきたが、調査等により客観的に評価を行ったことはない。文部科学省が2017年に取りまとめた「障害のある学生の修学支援に関する検討事項（第2次まとめ）」では、障害者差別解消法で示された「不当な差別的取り扱い」や「合理的配慮」について大学等における基本的な考え方と対処等を示すと同時に、合理的配慮の妥当性や、提供した支援についてのモニタリングを行い、必要がある場合には内容の調整を行うことを推奨している。したがって、現在バリアフリー支援室で実施しているような学生の支援状況を個別に把握することも重要であるが、本学の障害のある学生への支援の全体像について把握することも重要であると考えられる。

そこで本研究では、バリアフリー支援室を利用する学生を対象に、修学上の合理的配慮やバリアフリー支援室の支援業務に関するアンケート調査を実施し、障害のある学生の支

援ニーズや支援の満足度について分析し、今後の学内の障害学生支援の充実を図るための基礎的資料とする。

2. 方法

2-1. 調査対象者と調査期間

2020年10月に、バリアフリー支援室を利用する学生へアンケート調査を行った。バリアフリー支援室に登録のある学生のうち、今年度利用歴がありアンケート調査への協力を承諾した学生19名（回収率：100%）に調査票を手渡しし、記入後に回収した。なお、実施に際し、本調査への回答は任意であること、無記名での回答であり、個人が特定されることはないこと等を紙面に記し、倫理面への配慮を行った。

2-2. 調査内容

調査用紙は、(1) フェイスシート、(2) 修学支援、(3) 個別支援、(4) 居場所支援、(5) 学生との交流、(6) 連携、(7) バリアフリー支援室の対応、(8) 2020年度コロナウィルス感染症への対応で構成された。

(1) フェイスシート

入学年度、所属学部・研究科、障害名、支援の利用開始時期について、選択肢の中から回答を求めた。障害名については、①肢体不自由、②聴覚障害、③視覚障害、④精神障害、⑤発達障害（自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害、限局性学習障害）、⑥慢性疾患その他の機能障害等を選択肢とした。

(2) 修学における合理的配慮

①合理的配慮の申請の有無：「合理的配慮の申請をしたことがありますか」という質問に対し、「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めた。②授業における合理的配慮の内容：「パワーポイント等の資料の配布」、「授業の録音許可」、「板書撮影の許可」、「グループワーク時の配慮」、「課題提出の期間延長」、「PC持ち込みでの授業受講」、「そのほか（自由記述）」の中から、該当するもの全てに回答するよう求めた。③授業における合理的配慮の満足度：授業における合理的配慮の満足度について、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。④試験における合理的配慮の内容：「試験時間の延長」、「PCでの回答」、「別室受験」、「そのほか（自由記述）」の中から、該当するもの全てに回答するよう求めた。⑤試験における合理的配慮の満足度：試験における合理的配慮の満足度について、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。

(3) 合理的配慮の申請における手続き

①配慮申請の手続きの複雑さ：「配慮申請の手続きについて、どのように感じていますか」

という質問に対し、「複雑」、「やや複雑」、「どちらともいえない」、「やや簡単」、「簡単」の5件法で回答を求めた。さらに、その選択肢を選んだ理由について自由記述で回答を求めた。
 ②支援会議への参加必要性の認知：「支援会議（9月や3月に開催される配慮内容等を検討する会）へのご自分の参加の必要性について該当する箇所にチェックを入れ、その理由をご記入ください」という質問に対し、「必要性を感じない」、「あまり必要性を感じない」、「どちらともいえない」、「やや必要性を感じる」、「必要性を感じる」の5件法で回答を求めた。さらに、その選択肢を選んだ理由について自由記述で回答を求めた。

(4) 個別支援

①個別の面談の有無：「バリアフリー支援室のスタッフと個別に面談等を行うことはありますか」という質問に対し、「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めた。②個別面談の内容：「スケジュール管理のサポート」、「学習方法のアドバイス」、「履修登録（時間割）のサポート」、「就職についてのアドバイス」、「日常生活についての相談」、「友人関係についての相談」、「そのほか（自由記述）」の選択肢の中から、該当するもの全てに回答するよう求めた。③個別面談の満足度：個別面談の満足度について、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。

(5) 居場所支援

①居場所支援利用の有無：「居場所支援を利用したことがありますか」という質問に対し、「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めた。②居場所支援の満足度：居場所支援の開室時間（10時～15時）、座席の配置、居心地の満足度について、「不満」、「やや不満」、「どちらともいえない」、「やや満足」、「満足」の5件法で回答を求めた。③居場所支援の利用目的：「休憩」、「食事」、「勉強」、「空き時間の待機場所」、「その他（自由記述）」の選択肢の中から、該当するもの全てに回答するよう求めた。④その他：「その他、居場所支援についてご意見があればご記入ください」という質問に対し、自由記述で回答を求めた。

(6) 学生との交流

①ピア・サポーターとの交流：「障害のある学生を支援するピア・サポーターとの交流を希望しますか」という質問に対し、「希望しない」、「あまり希望しない」、「どちらともいえない」、「やや希望する」、「希望する」の5件法で回答を求めた。②自分と同じ障害のある学生との交流：「自分と同じ障害がある学生との交流を希望しますか」という質問に対し、「希望しない」、「あまり希望しない」、「どちらともいえない」、「やや希望する」、「希望する」の5件法で回答を求めた。

(7) 連携

①関係者・関係機関との連携の有無：「バリアフリー支援室の担当者から関係者・関係機関（授業担当教員や指導教員・キャンパスアドバイザー、所属学部の学務係等）へあなたに関する事で連絡をしてもらったことがありますか」という質問に対し、「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めた。②関係者・関係機関との連携の満足度：関係者・関係機

関との連携の満足度について、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。③家族との連携の有無：「バリアフリー支援室の担当者から、家族に修学を含めて大学生活のことで連絡をしてもらったことがありますか」という質問に対し、「はい」、「いいえ」の2件法で回答を求めた。④家族との連携の満足度：家族との連携の満足度について、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。

(8) バリアフリー支援室の対応

①相談担当者の満足度：「相談担当者の対応はいかがでしたか」の質問に対し、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。②受付の対応：「受付の対応はいかがでしたか」の質問に対し、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。③希望日時での予約の取得：「面談や検査等は希望する日程で予約できましたか」の質問に対し、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。④分散キャンパスでのバリアフリー支援室開室日：幸町キャンパス以外のキャンパスでのバリアフリー支援室開室日について、「もっと増やしてほしい」、「今のままでよい」、「利用していない」の3件法で回答を求めた。⑤その他：「バリアフリー支援室に対する要望等があればご記入ください」という質問に対し、自由記述で回答を求めた。

(9) 2020年度コロナウィルス感染症への対応

①コロナウィルス感染症への対応：バリアフリー支援室が実施しているコロナウィルス感染症対応について、「よくなかった」、「あまりよくなかった」、「どちらともいえない」、「ややよかった」、「よかった」の5件法で回答を求めた。さらに、選択した満足度の理由について自由記述で回答を求めた。②その他：「授業がオンライン等による遠隔講義になったことで困ったこと等があれば、ご記入ください」という質問に対し、自由記述で回答を求めた。

3. 結果

3-1. 分析対象者の属性について

分析の対象となる19名の学生は、文系学部・研究科が7名(36.8%)、理系学部・研究科が12名(63.2%)であった。障害種別としては、「発達障害」が14名(73.7%)、「発達障害・精神障害」が1名(5.3%)、「精神障害」が1名(5.3%)、「慢性疾患、その他の機能障害」が2名(10.5%)、「不明」が1名(5.3%)であった。調査回答者の支援室の利用開始年次を表1にまとめた。1年次から利用開始している学生が7名(36.8%)と最も

多く、次いで3年次が4名（21.1%）であった。

表1 調査回答者の支援室の利用開始年次

入学前	1年次	2年次	3年次	4年次
3 (15.8)	7 (36.8)	3 (15.8)	4 (21.1)	2 (10.5)

注：（）内はパーセント。以下同様に表記。

3-2. 修学における合理的配慮について

修学上の合理的配慮の申請状況や提供された配慮への満足度について分析した。その結果、授業で合理的配慮の申請をしたことがあると答えた学生は、16人（84.2%）であり、試験で合理的配慮の申請をしたことがあると答えた学生は、5人（26.3%）であった。なお、授業および試験において配慮申請をしていない3人（15.8%）の学生は、バリアフリー支援室の教員が定期的に面談を行っている学生である。授業および試験で提供された配慮内容を表2にまとめた。授業で提供された合理的配慮は「パワーポイント等の資料配布」が10人と最も多く、次いで「板書撮影の許可」が8人、「授業の録音許可」、「グループワーク時の配慮」、「課題提出の延長」が6人と続いた。「その他」には、「PCを利用したレポート作成」、「授業時の途中退室」、「座席の配置」、「授業の優先的履修」、「研究活動での配慮」等があった。試験で提供された配慮内容は、「試験時間の延長」、「別室受験」が3人と最も多く、「PCでの回答」が1人であった。「その他」には、「座席の配置」があった。

表2 授業および試験における配慮内容の内訳（複数回答）

授業における配慮内容	人数	試験における配慮内容	人数
パワーポイント等の資料配布	10	試験時間の延長	3
板書撮影の許可	8	別室受験	3
授業の録音許可	6	PCでの回答	1
グループワーク時の配慮	6	その他	1
課題提出の延長	6		
PC持ち込みでの授業受講	1		
その他	5		

授業および試験で合理的配慮を受けたことに対する満足度を表3にまとめた。授業では、「よかった」が8人（50.0%）と最も多く、「ややよかった」が7人（43.8%）であり、その理由としては、「授業がとても受けやすくなった」、「科目によって柔軟に対応してもらった」等が挙げられた。次いで、「どちらともいえない」が1人（6.3%）であり、「ほとんど

が遠隔授業であり、配慮内容がほとんど適用されなかった」と理由を挙げた。試験では、「よかった」が4人(80.0%)であり、「試験が受けやすくなった」、「安心感や集中力があがったと感じる」等が理由であった。次いで、「どちらともいえない」が1人(20.0%)であった。

表3 合理的配慮の満足度

	よくなかった	あまりよくなかった	どちらともいえない	ややよかった	よかった
授業で受けた合理的配慮の満足度	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (6.3)	7 (43.8)	8 (50.0)
試験で受けた合理的配慮の満足度	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	4 (80.0)

3-3. 合理的配慮の申請手続きについて

合理的配慮を希望する学生は、必要な書類を揃えて所属部局に提出し、所属部局の担当教職員、バリアフリー支援室の教員、未成年の場合は家族を含めて合理的配慮の合意形成を行うための会議(支援会議)に参加する。このような手続きについて学生自身がどのように感じているかを表4にまとめた。その結果、「どちらともいえない」が10人(62.5%)と最も多く、その理由としては「特に煩雑・簡単だと感じたことがない」、「申請書類がたくさんあるが、申請する上では必要な内容だと思うから」等が挙げられた。次いで、「やや簡単」、「やや複雑」がそれぞれ3人(18.8%)であり、「やや簡単」の理由として「PCで打ち込む形になってから、やりやすくなったため」、「やや複雑」の理由として「初回時は診断書の発行もあり、やや手続きが煩雑に感じた。2回目以降はそうでもない」等であった。

表4 配慮申請の手続き

複雑	やや複雑	どちらともいえない	やや簡単	簡単
0 (0.0)	3 (18.8)	10 (62.5)	3 (18.8)	0 (0.0)

次に、支援会議への学生自身の参加の必要性について表5にまとめた。その結果、支援会議への参加の必要性について、「どちらともいえない」が6人(37.5%)と最も多く、その理由としては「参加の意思がないわけではないが、本業を優先した場合は時間・労力コストを会議参加に費やせない」、「まだよくわからない」等が挙げられた。次いで、「あまり必要性を感じない」が4人(25.0%)であり、「自分が言えることはあまりないと思う」と理由を挙げた。「やや必要性を感じる」が3人(18.8%)であり、「先生と考えを共有できるから」が理由であった。

表 5 支援会議参加の必要性

必要性を感じない	あまり必要性を感じない	どちらともいえない	やや必要性を感じる	必要性を感じる
2 (12.5)	4 (25.0)	6 (37.5)	3 (18.8)	1 (6.3)

3-4. 個別支援について

バリアフリー支援室における個別支援の状況について分析した。その結果、個別支援を利用したことがあると答えた学生は、17人(89.5%)であった。個別支援の面談内容(表6)は、「スケジュール管理のサポート」が14人と最も多く、次いで「履修登録のサポート」が13人、「学習方法のアドバイス」、「日常生活についての相談」が9人と続いた。個別支援の満足度を表7にまとめた。「よかった」が13人(76.5%)と最も多く、その理由としては、「履修登録でいろいろと助言ももらえたから」、「自分で管理することが難しいため、先生と一緒にできて助かっているから」等が挙げられた。次いで「ややよかった」が4人(23.5%)であり、「大学生活でわからないことを相談できた」、「自分だけでは決められないことも相談内容に含まれていて、結果として生活がスムーズに進んだから」等と理由を挙げた。

表 6 個別支援の面談内容(複数回答)

面談内容	人数
スケジュール管理のサポート	14
履修登録のサポート	13
学習方法のアドバイス	9
日常生活についての相談	9
就職についてのアドバイス	2
友人関係についての相談	1

表 7 個別支援の満足度

項目	人数(%)
よかった	13(76.5)
ややよかった	4(23.5)
どちらともいえない	0(0.0)
あまりよくなかった	0(0.0)
よくなかった	0(0.0)

3-5. 居場所支援について

居場所支援の利用状況や目的、利用の満足度について分析した。その結果、居場所支援を利用したことがあると答えた学生は、9人(47.4%)であった。居場所支援の利用目的は、「勉強」が7人と最も多く、「休憩」、「食事」、「空き時間の待機場所」がそれぞれ4人であった。居場所支援利用の満足度を表8にまとめた。居場所支援の開室時間は、長期休暇を除き10時～15時である。その開室時間の満足度については、「どちらともいえない」が3人(33.3%)、「満足」、「やや不満」が2名(22.2%)、「やや満足」、「不満」が1名(11.1%)であった。また居場所支援スペースは、4人で着席できる座席と仕切りで空間を分け個別で使用するスペースに分かれている。そのような座席の配置の満足度については、「満足」が4人(44.4%)、「どちらともいえない」が3人(33.3%)、「やや満足」、「やや不満」がそれぞれ1人(11.1%)であった。居場所支援の居心地の満足度は、「やや満足」が4人

(44.4%)、「満足」が3人(33.3%)、「どちらともいえない」「やや不満」が1人(11.1%)であった。

表8 居場所支援利用の満足度

	不満	やや不満	どちらとも いえない	やや満足	満足
居場所支援の開室時間(10時~15時)	1 (11.1)	2 (22.2)	3 (33.3)	1 (11.1)	2 (22.2)
座席の配置	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (33.3)	1 (11.1)	4 (44.4)
居場所支援スペースの居心地	0 (0.0)	1 (11.1)	1 (11.1)	4 (44.4)	3 (33.3)

3-6. 学生との交流について

障害のある学生を支援するピア・サポーターおよび自分と同じ障害のある学生との交流の希望について表9にまとめた。その結果、ピア・サポーターとの交流について、「希望しない」、「あまり希望しない」が6人(31.6%)と最も多く、次いで、「どちらともいえない」が3人(15.8%)、「希望する」、「やや希望する」が2人(10.5%)であった。同じ障害のある学生との交流について、「どちらともいえない」が9人(47.4%)と最も多く、次いで「あまり希望しない」が6人(31.6%)、「やや希望する」、「希望しない」が2人(10.5%)であった。

表9 学生との交流の希望

	希望する	やや希望する	どちらとも いえない	あまり 希望しない	希望しない
障害のある学生を支援する ピア・サポーターとの交流	2 (10.5)	2 (10.5)	3 (15.8)	6 (31.6)	6 (31.6)
自分と同じ障害のある学生との交流	0 (0.0)	2 (10.5)	9 (47.4)	6 (31.6)	2 (10.5)

3-7. 連携について

バリアフリー支援室の担当者から、修学に関することで関係者・関係機関や家族に連絡をとってもらった経験(以下、連携)や連携の満足度について分析した。その結果、関係者・関係機関との連携の経験があると答えた学生は、17人(89.5%)、家族との連携の経験があると答えた学生は、10人(52.6%)であった。学内および家族との連携に対する満足度を表10にまとめた。関係者・関係機関との連携に対する満足度は、「よかった」が12人(70.6%)と最も多く、次いで「ややよかった」が4人(23.5%)であり、「外部の関係者との仲介を担ってくれるから」、「学部の棟に直接行って担当教員に会うことはハードルが高いため、先生に連絡してもらえてよかった」、「困ったときにとりあえず聞く先ができ

た」、「先生等に話が通りやすくなった」等が理由であった。次いで「どちらともいえない」が1人（5.9%）であった。家族との連携に対する満足度は、「よかった」、「ややよかった」が4人（40.0%）と最も多く、「家族に連絡してもらえたのはよかったが、家族から先生に連絡していないか不安」、「自分ではうまく説明できないから」等が理由であった。次いで「どちらともいえない」が2人（20.0%）であり「自分からの連絡だけより今の状況が伝わりやすくなった」等が理由であった。

表 10 関係者・関係機関および家族との連携の満足度

	よくなかった	あまり よくなかった	どちらとも いえない	やや よかった	よかった
関係者・関係機関への連絡	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.9)	4 (23.5)	12 (70.6)
家族への連絡	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (20.0)	4 (40.0)	4 (40.0)

3-8. バリアフリー支援室の対応について

バリアフリー支援室の対応に関する満足度について分析した。相談担当者および受付の対応に対する満足度を表 11 にまとめた。その結果、相談担当者の対応の満足度は、「よかった」が16人（84.2%）と最も多く、その理由としては、「直接対応してくれるから」、「なんでも相談できるから」等が挙げられた。次いで「どちらともいえない」が2人（10.5%）であり、「比較対象がない」、「どう評価すればよいかわからない」が理由であった。「ややよかった」が1人（5.3%）であった。受付対応の満足度は、「よかった」が15人（78.9%）と最も多く、「スムーズで迅速に取り計らってもらえるから」、「話しやすかったから」等の理由であった。次いで「ややよかった」、「どちらともいえない」が2人（10.5%）であり、「どちらともいえない」の理由には、「比較対象がない」、「どう評価すればよいかわからない」があった。相談や検査等の予約取得に対する満足度は、「よかった」が14人（73.7%）と最も多く、「日程通りだから」、「希望に沿っており、原則それが通らなかったことはないように思う」等が理由であった。次いで「ややよかった」が3人（15.8%）であり、「ほぼ希望通りだった」が理由であった。「どちらともいえない」が2人（10.5%）であり、「先生方は少し忙しいようなことが多いから」、「授業以外は空いているので、希望する日程がない」が理由であった。また林町キャンパス、三木町農学部キャンパスでのバリアフリー支援室開室日については、そのキャンパスに所属する学生11人中、「今のままでよい」が9人（81.8%）と最も多く、次いで「利用していない」が2人（18.2%）であった。なお、2020年11月現在の幸町キャンパス以外でのバリアフリー支援室開室日は、林町キャンパス：週2回（14時～17時）、三木町農学部キャンパス：月2回（11時～13時）である。定例の開室日以外に対応が必要な時は、適宜担当者がそれぞれのキャンパスに出向いて対応している。

表 11 バリアフリー支援室の対応に関する満足度

	よくなかった	あまりよくなかった	どちらとも いけない	やや よかった	よかった
相談担当者の対応	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (10.5)	1 (5.3)	16 (84.2)
受付の対応	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (10.5)	2 (10.5)	15 (78.9)

3-9. 支援利用開始年次の違いによる満足度の差の検討

入学前や1年次の早期から支援を受けている学生と2年次以降になって支援を受けた学生によって、合理的配慮を受けたことに対する満足度、個別面談に対する満足度、関係者・関係機関および家族との連携に対する満足度に差がないかを検討した(表12)。なお、満足度については「よくなかった」を1点、「あまりよくなかった」を2点、「どちらともいえない」を3点、「ややよかった」を4点、「よかった」を5点として割り当てた。その結果、関係者・関係機関との連携に対する満足度において、2年次～4年次でバリアフリー支援室の利用を開始した学生の方が有意に値が高かった($t(15) = 2.2, p < .05$)。

表 12 バリアフリー支援室利用開始年次の違いによる満足度の差の検討

	入学前～1年次 (N=10)		2年次～4年次 (N=9)		t 値
	M	SD	M	SD	
授業における合理的配慮の満足度	4.4	0.7	4.5	0.5	0.4
試験における合理的配慮の満足度	5.0	0.0	4.0	1.4	1.0
個別支援の満足度	4.8	0.4	4.8	0.5	0.1
関係者・関係機関との連携の満足度	4.4	0.7	5.0	0.0	2.2 *
家族との連携の満足度	4.3	0.8	4.0	1.0	0.4

注：* $p < .05$

3-10. 2020年度コロナウイルス感染症への対応について

バリアフリー支援室におけるコロナウイルス感染症対策として、面談は原則予約のみの対応とし、実施に際しては検温、問診票への記入、手指の消毒を行い、面談後には使用した机やパソコン等のアルコール消毒を行うこととした。また、これまでのメールや電話による相談に加えて、ビデオ通話による相談体制も整えた。ビデオ通話による面談を希望する場合には同意書を取ることにした。このようなコロナウイルス感染症対策への満足度を表13にまとめた。「よかった」が9人(47.4%)と最も多く、その理由としては「毎回ちゃんと検温があり、徹底したウイルス対策をしているから」、「オンライン等で打ち合わせも安心して行うことができたため」等が挙げられた。次いで「どちらともいえない」が6人(31.6%)であり、「コロナウイルス感染拡大が収束しないなかで、良い悪いを判断できな

いから」等の理由であった。「ややよかった」が4人(21.1%)であり、「コロナ前がわからないため、わからない」が理由であった。授業がオンライン等による遠隔講義になったことで困ったこと等として、「メール等での連絡が多すぎるので、平常時より混乱している点があったと思う」、「日数の間隔がつかめない」、「課題が多かった」が挙げられていた。

表 13 コロナウィルス感染症対策に関する満足度

よくなかった	あまりよくなかった	どちらともいえない	ややよかった	よかった
0 (0.0)	0 (0.0)	6 (31.6)	4 (21.1)	9 (47.4)

4. 考察

本研究では、バリアフリー支援室を利用する学生を対象に、修学上の合理的配慮やバリアフリー支援室の支援業務に関するアンケート調査を実施し、障害のある学生の支援ニーズや支援の満足度について分析した。調査から、以下のことが明らかになった。

本調査に協力した学生の半数が大学生活の早い段階（入学前または1年次）からバリアフリー支援室を利用しており、障害種別では発達障害が7割を超えていることが明らかになった。内野ら（2017、35頁）は発達障害学生の支援の現状として、「入学前に診断を受けている場合、それまで支援を受けた経験があるため、入学時や入学後の早い段階で相談や支援につながり、その後の学生生活でもさまざまな問題に直面しているものの、修学状況は順調である」と報告しており、できるだけ早い段階で必要な支援につながることは、学生自身が修学を進めるうえで重要であるといえる。支援をスムーズに受けられるように高大連携にも注力していく必要があるであろう。

修学における合理的配慮については、本調査に協力した学生の8割が合理的配慮の申請をしており、大学から提供された合理的配慮の満足度は高いことが明らかになった。学生からの「授業や試験を受けやすくなった」、「科目により柔軟に対応してもらえた」等の意見を踏まえると、障害の状況に応じて適切な環境調整が行われており、そのことが満足度の高さにつながったのではないかと考えられる。また本調査から、合理的配慮を受けたことの満足度は高いことが明らかになったが、支援を受けたことで社会的障壁の除去につながったか等という支援の有効性については調査ができていない。そのため、今後は支援の有効性といった観点からも詳細に調査を進めることが必要である。

合理的配慮の申請手続きおよび支援会議への参加については、学生により捉え方が様々であった。申請手続きに関しては、「やや複雑」の回答が2割程度あり、「何度も手書きで書かないといけない」といった意見があった。必要書類は、パソコンで入力しても問題はないため、その点について部局との情報共有を図ると同時に配慮申請を行う学生へのアナウンスも進めていく必要がある。また、支援会議への学生自身の参加の必要性について「必

要性を感じる」、「やや必要性を感じる」の回答は2割であり、会議に参加する必要性はあまり認識されていないことが明らかとなった。合理的配慮は、「障害のある学生からの「意思表示」が支援の出発」（西村、2018、7頁）であり、「本人・関係者間での建設的な相談・対話が重要」（吉原ら、2018、37頁）である。そのため今後学生自身が主体的に参加できるように、会議の場で学生自身が意思表示する機会を確実に設けることはもちろんのこと、事前に学生自身と会議の場で話し合う内容を明確にする等の打ち合わせを行ったり、支援会議の意図を丁寧に説明したりという事前準備の必要性が示された。

個別支援については、本調査に協力した学生の約9割が利用しており、利用した学生全員が「よかった」、「ややよかった」と肯定的に捉えていた。面談内容は「スケジュール管理のサポート」、「履修登録のサポート」、「学習方法のアドバイス」という修学に関することが多く、「日常生活についての相談」も利用者の半数以上が相談していることが分かった。大学生生活は、障害の有無にかかわらず、高校までのようにあらかじめ決められた時間割やクラス担任による状況の説明や活動の指示等がない状況であり混乱が生じやすい。原田ら（2018）は、「高校までの学校段階と大学との様々なギャップ」による「強い戸惑いや困難」が恒常的に起こり得ることを「大1コンフィージョン」と命名し、その背景には、授業の履修方法が高等学校に比べて複雑化することや、学習方法の相違に起因した困難が大きいことを見出している。さらに、高橋（2012、22頁）は、「小・中学校や高校とのギャップが発達障害のある学生の適応に大きな影響を与えている場合がある」と指摘している。したがって、本調査に協力した学生の7割以上が発達障害のある学生であることを踏まえると、「スケジュール管理」や「履修登録のサポート」等は大学生生活を送るうえで非常に重要なものであり、バリアフリー支援室の個別支援が十分に機能していることがうかがえる。

居場所支援については、居場所支援を利用したことがある学生は回答者の約半数であり、利用目的は「勉強」が最も多いことが明らかになった。居場所支援は、バリアフリー支援室に登録している学生の利用に限っている。そのため、学内の他のフリースペースに比べると人の出入りは少なく、集中して課題に取り組めるといった理由から「勉強」を目的に利用する学生が多いのではないかと推測される。また、居場所支援利用の満足度は、学生により捉え方が様々であり、居場所支援の開始時間（10時～15時）について「やや不満」、「不満」と回答した学生が3割程度であった。2020年11月現在は、コロナウィルス感染症対策として居場所支援の利用は中止しているが、今後居場所支援の利用を再開する際は、学生のニーズを聞き柔軟に対応していく必要がある。

学生（ピア・サポーターまたは同じ障害のある学生）との交流については、「希望する」、「やや希望する」と回答した学生は1割であることが明らかとなり、学生と交流することに対して消極的であることがうかがえた。今回の調査では交流の意図を明示していなかったため、交流する目的等が具体的にイメージできなかった可能性も考えられる。今回の調査では、交流を希望する学生の割合は低かったが、交流する意図等がわからないままに回答した結果であるとすれば、改めてより具体的な情報を提示し調査する必要もあるであろう。

関係者・関係機関および家族との連携については、連携を経験した学生の8割以上が「よかった」、「ややよかった」と肯定的に捉えていることが明らかとなった。学生からの「先生等に話が通りやすくなった」、「直接担当教員に会うことはハードルが高いため、先生に連絡してもらってよかった」等という意見や本調査に協力した学生の7割以上が発達障害のある学生であることを踏まえると、西村（2018、7-8頁）の「発達障害のある学生の場合、適切な支援を求めることにむずかしさがある」という指摘と合致する。したがって、自分にとって必要な支援や情報等をバリアフリー支援室で共に考え、支援室の教員または相談員が関係者・関係機関および家族との間に入り、状況の説明や希望する支援等について仲介することで適切な支援を受けることにつながり、連携に対する満足度が高くなったのではないかと考えられる。

バリアフリー支援室の対応については、相談担当者や受付、予約の取得について「よかった」、「ややよかった」と肯定的に捉えている学生が8割を超えていることが明らかになった。「どちらともいえない」と回答した学生の理由としては、「比較対象がない」、「どう評価すればわからない」であり、ネガティブな評価ではないと推測される。また、林町キャンパス、三木町農学部キャンパスでのバリアフリー支援室の開室については、「今のままでよい」と利用学生全員が回答しており、現状の開室日で満足していることがうかがえた。

バリアフリー支援室の利用開始年次による、合理的配慮、個別支援、関係者・関係機関および家族との連携に対する満足度の違いについては、入学前または1年次から支援室を利用している学生に比べて、入学後1年以上経過してから支援室を利用した学生の方が、関係者・関係機関との連携に対する満足度が有意に高いことが明らかとなった。2年次以降に初めて支援室を利用した学生の中には、大学入学後に診断を受けた学生が一定数存在すると考えられる。内野ら（2017、35頁）は、診断を受けることのメリットとして、問題の原因の捉え直しができる点を挙げ、「診断を受け相談を続ける中で、学生本人の特性の認識が促され、自分なりの対処を工夫することができるようになったことで、修学状況や学生生活への適応が向上した」と報告している。関係者・関係機関との連携に対する満足度に違いが生じた背景としては、修学上のうまくいかなさを自身の問題として捉えていたことが、診断を受け支援室を利用する中で、障害に起因するものだと初めて理解し対処法を共に考えると同時に、関係者・関係機関との仲介をバリアフリー支援室が担うことで、適切な支援を受けられたという結果を得たからではないかと推測する。また、学年が上がると研究室配属および研究活動、就職活動等に取り組むこととなり、関係者・関係機関との連携も多岐にわたることも満足度に違いが生じた要因の一つではないかと推測する。

バリアフリー支援室が実施したコロナウィルス感染症対策については、利用した学生の7割程度が「よかった」、「ややよかった」と肯定的に捉えていることが明らかとなった。さらに、ビデオ通話による面談を実施する場合は、利用にあたってのルールを定め紙面にて同意を得ていることも学生の安心につながっている可能性がうかがえる。今後も、学生の安全に配慮しながら支援業務を行っていきたい。

最後に本研究の限界を述べる。本調査よりバリアフリー支援室を利用する学生の満足度は全般的に高いことが明らかになったが、これは回答者バイアスが影響している可能性が考えられる。本研究は、バリアフリー支援室の教員または相談員を経由して調査依頼を行っており、回答があった学生のみが対象であった。したがって、回答のなかった学生や今年度の利用がない学生には調査が行えていない。佐々木ら（2020、76頁）は、「大学から提供された支援に満足していない学生は関係部署とのコンタクトが減っている可能性が推察される」と指摘しているように、本研究においても留意が必要である。

参考文献

- 原田新・池谷航介・松井めぐみ・望月直人（2018）「「大1コンフュージョン」の実際（大1報）—高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第8号、97-107頁。
- 文部科学省（2017）障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）について（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/074/gaiyou/1384405.htm）
＜2020年11月10日アクセス＞
- 西村優紀美（2018）「発達障害のある大学生の支援～修学支援から就職後の支援まで～」『学園の臨床研究』第17号、5-14頁。
- 大沼泰枝・坂井聡・葛城浩一（2017）「香川大学における障害学生支援に関する現状と課題—学生指導担当教職員研究会の実践報告—」『香川大学教育研究』第14号、153-164頁。
- 大沼泰枝・坂井聡・大西歩実（2018）「香川大学における障害学生支援に関する現状と課題（2）—バリアフリー支援室の活動報告—」『香川大学教育研究』第15号、205-215頁。
- 佐々木銀河・脇貴典・青木真純・高橋知念・竹田一則（2020）「令和元年度（2019年度）プロジェクト研究「障害のある学生への修学支援における学生本人による効果評価に関する調査研究」研究報告書」（https://www.jasso.go.jp/about/statistics/project/_icsFiles/afieldfile/2020/05/21/2019projectresearch.pdf）
＜2020年11月10日アクセス＞
- 塩入美希・大沼泰枝・日高幸亮・坂井聡（2020）「香川大学における障害学生に対するピア・サポーター養成の現状と課題」『香川大学教育研究』第17号、141-151頁。
- 高橋知音（2012）「発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック」『学研教育出版』。
- 内野悌司・高田純・小島奈々恵（2017）「発達障がい学生に対する支援の現状と課題—A大学の調査結果より—」『健康科学研究』第1巻、第1・2号合併、25-38頁。
- 吉原正治・山本幹雄・岡本百合・磯部典子・三宅典恵・日山亨・黄正国・坂本昌子・佐野（藤田）真理子（2018）「障害学生支援の合理的配慮の妥当性評価からみた基準作りに関する検討」『広島大学保健管理センター研究論文集』第34号、29-40頁。